

それぞれの最終楽章・団地で支える

構成・朝日新聞佐藤陽記者

(1) 「死んでもいい、プールへ」団地の一室で介護は始まった

2019年9月22日



ぐるんとびー社長 菅原健介さん

僕は2012年、看護師である母の会社のもとで、小規模多機能型居宅介護＝メモ参照＝の事業所「絆」を開設しました。15年に独立し、「ぐるんとびー」を起業しました。今は神奈川県藤沢市大庭の団地の一室で小規模多機能型の事業所を開き、訪問看護ステーションなども運営しています。

初回は、「ぐるんとびーの原点」ともいえる男性、柳田成大（しげひろ）さん（享年83）を紹介します。中小企業の元経営者でした。ちょうど「絆」をやめることが決まり、独立する直前に関

わった方でした。40年以上続けてきた趣味がプール。中咽頭（いんとう）がんの末期、ご本人は「もう一度プールに行きたい」と何度も言っていました。

しかし当初、病院からは「体力も免疫力も低下しており、プールに行くのは勧められない」と止められていました。奥さまも「もしものことがあったら」と否定的でした。

そこで退院をきっかけに、自宅で柳田さんご家族、ケアマネジャーと僕で話し合いました。柳田さんの主張は一貫していました。「人が死んでもいい、と言っているのに、やりたいことを止めるのが医療や介護の仕事か。そんな介護や医療なら、やめちまえ！」

僕が「一番やりたいことがプールですよ？」と聞くと、「何度も行きたいって言うてるじゃないか！」と叱られてしまいました。柳田さんは、こうも言っていました。「医者は『少し食べられるようになったら、プールに行こう』と言っているけど、何も体動かさないのに、

食欲出るわけないだろ」。奥さんが「お医者さんは体力ないと厳しいと言っているし……」と心配すると、「体力つけるために行くんだろ！」と返します。

僕が「やりたいことやらないと、ストレスたまりますもんね。わかりました、調整しましょう」と言うと、「何を調整するんだ！」とまた叱られました。

後日、在宅医である松木孝道院長のもとで、本人と家族、そして関わる医療・介護スタッフが集まりました。本人の「死んでもいいからプールに行きたい」という思いと、想定されるリスクを確認した上で、かかわる皆も覚悟をもって本人の思いを支える、ということになりました。

15年2月、柳田さんと一緒にプールに行きました。水しぶきが少し口に入るだけで、むせてしまいました。放射線治療の影響で足が炎症を起こしており、激痛が走ります。「いてえ、くそ、いてえなあ」と言いながら、すごい形相をしながら、1時間ほど歩き続けました。その姿をプールのライフセーバー全員が、監視室から身を乗り出し、見守りました。

終わった後、柳田さんは「痛かったけど、最高だったよ。やっぱりプールはいいなあ。これで、いつ死んでもいい。ありがとな！」と満面の笑みで話しました。プールで一歩一歩足を踏み出していく、あの背中に、「最後まで自分らしく生き切るんだ」という柳田さんの生き様を見た思いがしました。いくつになってもどんな状態でも、人は輝くことができる、と教わりました。

柳田さんは実は、「ぐるんとびー」の最初の契約者でした。でも2回目のプールに行くことなく、約1カ月後に旅立ちました。

団地の一室を使った小規模多機能型の事業所は、「ぐるんとびー」が日本で初めて、とされています。そのチャレンジを柳田さんは天国から見守ってくれているはずです。そして、僕らにこう語りかけているような気がします。「死んでもいいから、やりたいことがある。それを支えるのが、医療や介護の役目だぞ」。その教えを胸に、これからも利用者さんに伴走し続けます。

小規模多機能型居宅介護

「小規模多機能」と略される。介護保険の地域密着型サービス。一つの事業所で、デイサービス、ショートステイ、訪問介護の三つのサービスを状況に応じて利用できる。定員29人と小規模で、いつも顔なじみの職員が対応するのがメリット。ただ、地域によって事業所数にばらつきがある。訪問看護サービスも加わった「複合型」もある。



(2) 元数学講師は超わがまま でも介護スタッフは助け続けた

2019年9月29日

みなさんは「こんな夜更けにバナナかよ」という映画を見たことはあるでしょうか？ 自由に生きる筋ジストロフィー患者と、彼を支える多数のボランティアたちの実話を元にした映画です。今回紹介する荻原一雄さん（享年51）は、まさにこの映画のように暮らしていました。

脳梗塞（こうそく）の後遺症で全身まひになり、左手が少し動く程度。通常は寝たきりになっておかしくない状態ですが、電動車いすで移動していました。2016年3月から、関わらせてもらいました。

うちのスタッフたちは、頻繁に「救援コール」を受けました。「ぐるんとびー」は団地の6階、荻原さんの自宅は4階なので、外出の際は「ドア開けて」と必ず連絡が来ました。それだけならまだいいのですが、雨の日に「ぬれるから外出しない方がいいですよ」と言っているのにケーキを買いに出かけて、ずぶぬれになって「助けてー」。映画を見に行き、気持ち悪くなって吐いてしまい、「助けてー」。バスに乗ろうとして転倒し、起こしに行くこともありました。

連絡手段は、フェイスブックのメッセージです。使える左手の指2本を駆使し、パソコンや携帯に打ち込みました。

そのたびに助けに行くのが、施設管理者の神谷直美（53）ら3人の介護スタッフたち。人の好き嫌いが激しく、スタッフも特定の間人しか出入りできませんでした。

まさに映画「こんな夜更けにバナナかよ」のように、突然「パクチーが食べたい」と言い出し、スタッフが買いに行ったこともありました。でも買って自宅に持っていくと、今度は「もういらない」。

電気ポットをとろうとして落としてしまい、足にやけどをしたことも何度かありました。訪問看護師に手当てをしてもらおうと思ったのですが、「知らない人に来てほしくない」と拒否されました。重度の糖尿病もあり、足はずっと真っ赤なままでした。

スタッフと「どこまで、つき合うべきか。小規模多機能の介護報酬で、どこまでやるべきなのか」について、何度も話し合いました。でもじかに接するスタッフたちは「私たち、や

りたいので、やらせてください」という意見でした。呼び出されるたびに、本人には「何やってんの？」と言いながらも、サポートをし続けました。

元気なころは、大学受験予備校の数学講師だったそうです。スタッフにも時々、難問を出題していました。それがまた、新たなトラブルの火種になります。頭の中で数学の問題を解いているときに声をかけると、急にムツとして口を利かなくなりました。「俺の好きなタイミングで、ケアしてほしい」というのが彼の希望だったのです。

「また教壇に立ちたい」という夢があり、団地の子どもたちに勉強を教えていました。しかしそれも、行くタイミングが悪いとムツとするのです。子どもたちも、徐々に敬遠するようになってしまいました。

こんな気むずかしい荻原さんですが、たくさんの友達がいました。例えば「今度、新宿のホテルに泊まりに行くから、一緒に行ってくれる人いない？」とフェイスブックで募集します。すると様々な人から反応があったといいます。予備校時代の教え子、学生時代にやっていたオーケストラの友達、行きつけだったカフェのスタッフ……。団地内の自宅にも、ひっきりなしに友達が来ていました。

荻原さんは一見、「自分に優しく、他人に厳しい人」のように見えます。確かにそういう面もあるかもしれませんが、友達の困り事の相談によくのっていたようです。だからこそ、多くの友達がサポートしてくれたのだと思います。

衰弱が進んだ今年春ごろから、神谷は仕事帰りにほぼ毎日、荻原さんの部屋に寄りました。東京都西部に住むお母さんと3人になることもありました。荻原さんにとってお母さんは、自分の素の感情をそのままぶつけられる相手でした。結果として、けんかになることも多く、神谷は2人の「中和剤」の役割も担いました。

5月、「広島でどうしても聴きたいオーケストラのコンサートがある」と言い出しました。日数がなかったのですが、現地のホテルなどと調整し、夢を実現させました。スタッフも同行しました。そのとき血液データを見た医師は「この数値で生きているのが、おかしいくらい」と驚いていました。荻原さんの生命力を感じました。

その2カ月後にも、行きたいコンサートがありました。大学オーケストラ部の先輩が演奏するので、花束を渡したい、というのです。神谷は、荻原さんとこんな約束をしました。「もし生きていたら、一緒に行こう。そうでなかったら、私が行って花束を渡すから」。荻原さんは、コンサート前の6月21日、自宅でお母さんと妹さんに見守られながら旅立ちました。7月、神谷はコンサートへ行き、約束を果たしました。

言葉を選ばずにいうと、荻原さんは本当に「超わがままなおやじさん」でした。でも、なぜか憎めない。僕やスタッフは、3年ちょっとの関わりから、大事なことを教わりました。

「人間、自由に生きていいんだ」「持つべきものは友」。荻原さんは、天国でも自由人であり続けていることでしょう。



(3) 「俳句は私の人生よ」認知症女性が最期まで詠んだ日常

2019年10月6日

自分の生きがいをもっている方は、病気があっても最期まで生き生きと過ごします。今回ご紹介する金杉ヤエさん(享年95)もそうです。アルツハイマー型認知症でしたが、俳句が大好きで、その話をしているときは笑顔があふれていました。

ヤエさんは、僕の運営する「ぐるんとびー」が入る団地に、長女のなほみさん(72)と一緒に住んでいました。団地の自治会長だったなほみさんから「最近母の様子がおかしいので、面倒を見てほしい」と相談を受けたのがきっかけです。2016年12月から、「ぐるんとびー」で関わるようになりました。

認知症の症状が進んで外出が減り、あるときから句会にも行かなくなっていました。普段は表情もやや暗く、笑顔もありません。本人は「介護事業所に通う必要なんてない」と、外に出ようとしませんでした。そこで作業療法士の高栖望(26)が、「俳句を教えてください」とヤエさんの自宅に訪問介護として通い始めたのです。

俳句を教えるときのヤエさんの表情は幸せそうでした。「あなたは筋がいいから、句会に来ない？」と誘われ、一緒に通うことにしました。久しぶりでしたが、句会の仲間たちは、ヤエさんを温かく迎えてくれました。高栖は俳句の経験がありませんでしたが、月1回の句会と一緒に通い続けました。

ヤエさんとの関係も深まってきたころ、高栖は「たまには、ぐるんとびーにも来ませんか？」と声をかけました。「そうね」と言って、デイサービスに通ってくれるようになりました。

やりとりを見ていると、ほほえましいものを感じます。高須がヤエさんから句会に出す宿題のチェックを受けていたとき。「ここは、木枯らしや、ですよ」と言われ、その通りに直しました。すると今度は「木枯らしや、じゃありません。木枯らしに、ですよ」と直されていました。

ほかのスタッフや利用者さんたちも、ヤエさんから俳句の薫陶を受けました。スタッフの多くは俳句を始め、作った句をぐるんとびーの共有ノートに書きためていきました。

大人だけではありません。ヤエさんが俳句を教えているときにも、団地の子どもたちが自由に入出入りして遊んでいます。その姿をヤエさんは、笑顔で眺めていました。

実は「ぐるんとびー」という名前は、地域を「ぐるんと」結ぶ、という意味があります。あえて団地の中に作り、地域の人たちのたまり場のようにしたかったのです。またこの名前には、僕が中高時代を過ごしたデンマークの偉人、グルントビーの思想を事業所に取り込みたい、という思いも込めました。

話を戻しましょう。自宅を訪問すると、ヤエさんとなほみさんは、頻繁に言い争いをしていました。時には、かなり激しく言い合っていました。娘さんが「一緒に住むのは限界よ」と言うので、団地内での別居や、グループホームへの入居を提案したこともあります。

あるスタッフは「娘さんは、弱っていく母を許せなかったのでは」と分析していました。一方のヤエさんは、なほみさんと激しくけんかしても、翌日には忘れていました。担当した在宅医は「最初は激しいやりとりに驚いたが、しばらくしてこれが2人にとってのコミュニケーションだと気づいた」と話しました。僕も、母と娘の愛情の形はそれぞれ違うのだ、ということを教えられました。

結局2人は、同じ部屋に住み続けました。そこには団地のメリットもありました。1階に住むヤエさんとなほみさんは、けんかをすると、よく6階の「ぐるんとびー」に駆け込んできました。後になってなほみさんは「愚痴を吐き出せ、本当に助けられた」と話してくれました。

そして今年7月13日、ヤエさんはなほみさんに見守られ、静かに息を引き取りました。亡くなる直前も、「俳句は私の人生よ」と話していたそうです。

亡くなって1カ月余が過ぎた8月下旬の夜。「ぐるんとびー」に、ヤエさんと関わったスタッフや在宅医ら約20人が集まりました。利用者さんの看取（みと）りについて振り返る「デス・カンファレンス」です。看護師でケアマネジャーの石川和子（39）を司会に、みんなヤエさんとの思い出や後悔について発言しました。涙ぐむスタッフもいました。

「俳句は、ヤエさんにとって一番心地よい世界だった」「『俳句は難しいですね』と相談すると、『いいのよ、日常の風景を読めば』と優しく言ってくれた」——。「あじさいや 3日続けて 昼カレー」など、スタッフが作った俳句も披露されました。あるスタッフが「私の俳句は狂句だと言われた」と言うと、場が和んで笑いが起きました。

亡くなる5日前、一緒に公園に散歩に出かけた介護スタッフの瀬戸口克巳（45）が、ヤエさんとの最後の思い出を語りました。きれいな花と記念写真を撮った後、「一句作りませんか？」と声をかけると、2句作ってくれたそうです。

「紫陽花の 花や黄色の 草の花」「フジ咲くや 公園通り 何か詠む」

その俳句をぐるんとびーのスタッフで共有するフェイスブックのメッセージに送っていました。車いすで笑顔のヤエさんの写真も一緒に。

最期まで俳句とともにあったヤエさん。ぐるんとびーの訪問看護ステーション人材募集のポスターに笑顔で映り、今も僕らを見守ってくれています。

（４）８時間歩き続けた認知症男性 本当に行きたかったのは？

どんな病気があっても地域で暮らし続ける道はある、ということをお教えくださった方をご紹介します。

神経性の難病「大脳皮質基底核変性症」だった岡本四郎さん（享年83）は、認知症の奥さま、独身の息子さんと一緒に、「ぐるんとびー」がある団地近くに住んでいました。岡本さんは失語症や認知症などの症状があり、結婚した娘さんも度々来られていました。

とにかく外に出たがり、何時間でも歩く。家族の制止をふりきって出て行き、何時間も戻らない。家族が付き添って、「帰ろう」といっても、帰らない。元々は穏やかな性格だった方なのですが……。

デイサービスにいても、じっとしてられず、どんどん出て行ってしまいます。訪問介護で入っても、突然自宅を出て行きます。そこで在宅医の先生が、小規模多機能型の「ぐるんとびー」につないでくれたのです。

家族だけの介護、限界に

2016年1月、僕が介護スタッフ2人とお宅にお邪魔しました。着いてしばらくすると、外に出て行ってしまいました。スタッフの1人が追いかけて、残った僕らは、ご家族の話をじっくり聴きました。

話は約6時間に及びました。ほかの事業所だと、初回の面接は1時間ほどが普通かもしれませんが。でも家族の思いを吐き出してもらう必要があります。最初の2～3時間は「私たち

家族は大丈夫」と言っていました。しかしそれを過ぎると「もしかしたら、きつくあたっているかも……。しんどいんです」と涙ながらに語ってくださるようになりました。

時にはそこまで時間をかけないと、家族の「本当に助けてほしい」という思いは、出てこないことがあります。家族だけの介護は、限界を超えていたのです。

話し合いの結果、当面は毎日、午前9時から午後6時まで訪問することを決めました。「訪問」といっても、最初のうちは、ほとんど外出への付き添いでした。1日8時間、外をずっと歩いていることもありました。黙々と歩き続けたり、突然レストランに入ったり、思うがままに行動していました。

あまり近くにいるといやがるので、つかず離れず、ちょうどよい距離感を保ちました。担当する介護スタッフは、岡本さんとの関係が良い女性3人に限られました。交代で丸一日はりつく形になりました。遠いと自宅のある神奈川県藤沢市から東京都内まで行ってしまうので、途中交代はできませんでした。目が離せないので、スタッフはなかなかトイレに行けませんでした。

あるとき担当したスタッフの1人、神谷直美（53）から電話がかかってきて、「私たちにリハビリパンツ（おむつ）が必要です」と、言われたこともあります。神谷はぎりぎりまで我慢して、自宅に送り届けたときに、すぐにトイレを借りていたといいます。

行くところは、いろいろでしたが、小田急沿線が多いようでした。奥さまが一緒のときもありました。自宅近くの善行駅まで行って、改札のある階まで登るのですが、そのまま反対側に降りてしまう。それを数十回繰り返したこともあります。スタッフは、ずっと付き添いました。電車に乗ろうと改札に入るときは、スタッフがICカードを2枚持って対応しました。

ほかに相模大野（相模原市）や中央林間（神奈川県大和市）、町田（東京都町田市）の各駅に行きました。中央林間駅では、改札を出てしばらく歩きました。ご家族に聞くと、昔よくゴルフに来たそうです。その思い出に浸っていたのかもしれませんが。

お墓参りに行きたい？

数カ月たったころです。ご家族と話しているとき、「もしかしたら、父は（出身の）宮城県に墓参りに行きたいのでは」という話になりました。毎年年末にお墓参りに行っていました。が、病気になってからは行っていなかったそうです。息子さんが「一度、宮城に連れて行きます」と言い、お盆にみなさんでお墓参りに行きました。本当の気持ちはご本人しかわかりませんが、ずっと歩き続けていたのは、お墓参りに行きたかったのかもしれませんが。

帰ってくると、岡本さんの様子が落ち着いてきました。1日8時間、ということはありません、2～3時間ぐらいの外出がほとんどになりました。あとは自宅にいるようになりました。

自宅では寝ていることが多くなりましたが、そんな時間も家族の要望で訪問しました。ただそれは「ケア」というより、「家族の不安を和らげる」という意味合いが濃いものでした。そのため、一部は介護保険外の自費（お手伝いサービス）でお願いしました。

批判もありますが、「ケアの枠外」と判断した部分は自費でお願いするのはやむを得ない、と僕は考えています。子どものいる親が、仕事で疲れてご飯を作るのが大変なとき、作る能力はあっても自費で外食することと同じだと思うのです。

安らかな旅立ち

しばらくすると、岡本さんは「ぐるんとびー」のデイサービスにも来るようになりました。子どもたちとも笑顔で遊んでくれました。そして関わり始めて約10カ月後の11月25日、安らかに旅立ちました。

ご本人もご家族も、大変な時期がありました。しかし僕らがずっとそばにすることで、ご家族が休むことができ、心に余裕ができたのではないかと思います。

僕が尊敬する在宅介護の草分け、石川治江さんのご著書に、「介護はプロに、家族は愛を。」があります。僕はこの言葉が好きです。ご家族に「心の余白」ができると、ご本人も笑顔で過ごせるようになります。お互いが人としての優しさを取り戻し、穏やかな日常が戻ってきたのだと思います。

(5) 「おうち帰りましょ」母が介護スタッフだけに伝えた本

2019年10月20日

楽しいことをやっている、と、どんどん元気になっていく——。そんな姿を見せてくれた方が、安田敬子さん（享年90）です。大好きなプールでのリハビリで、車いすから自力歩行できるまでに回復したのです。

安田さんは「ぐるんとびー」の前身、「絆」時代からの利用者さんです。娘さんとお嬢さんと3人で同居していました。腰痛の悪化が理由で、2012年秋ごろから利用を始めまし

た。間もなく腰の痛みが強くなり病院に行くと、背骨の圧迫骨折だとわかり、そのまま入院してしまいました。

約半年後の13年春に退院、介護スタッフが、面接（アセスメント）に行きました。帰ってきて僕に、「歩けるようになって家事をしたい、というご希望をもっています。そのために『（大好きな）プールに行きたい』とおっしゃってます」と報告しました。

正直僕は、車いすで「プールに行く」というイメージはできませんでした。数日後、ご本人の意思を改めて確かめに行くと、「水着買ってきちゃったわ」。これはやるしかない、と思いました。

そしてスタッフが付き添い、念願のプールへ行きました。最初は、専用の車いすに乗り換え、水中に入りました。僕は理学療法士としての経験を生かし、体をどこまで水中に入れるかで、負荷を調整しました。

プールは原則週2回。自宅でも、毎日ベッドの上でできるリハビリ筋トレを欠かさず行っていました。徐々にプールで歩けるようになります。最初は、つま先でぴょんぴょん跳んでいく感じでした。

リハビリといっても、あえて前に立ち指導する、ということはありませんでした。「横歩きしましょう」などというと、どうしても笑顔がなくなってしまいます。なので、本人が歩くのを後ろからついていく形をとりました。「指導」でなくて、本人がやりたいことをしてもらうのが大事です。

その成果もあり、最初は歩行器や杖を使って歩くようになり、約5カ月後には自力歩行ができるようになりました。階段もスタスタ上り下りできるようになりました。病院で圧迫骨折がわかったときは、医師から「もう歩けない」とさえ言われました。娘さんも「朝、起き上がるのに、5分、10分かかっていたのに……。信じられない思いです」と回復に驚いていました。

プールを歩いているときのご本人の顔は、全然違います。「好きなことをやっている」というのが、回復の大きな要因でしょう。娘さんも「母は同窓会や宝塚歌劇団の観劇より、プールに行くことを選んだんですよ」と笑っていました。

別の利用者さんで、フラダンスが得意な80代の女性がいました。先日もファッションショーに出ていましたが、やはり表情が違う。血液データはかなり悪く、控室では寝ていたのですが、化粧をし始め、本番になると生き生きするんです。

安田さんの場合、身体機能の維持を目的としたプール利用だったので、介護保険を利用しました。そのおかげで、要介護3から要介護1まで改善したのです。

ただプールでのリハビリを、介護保険でやることに異論もあります。「ケア」ではなくて「趣味」だということです。当然僕らは、そこはスタッフ間で話し合い、慎重に判断します。いくら本人が「やりたい」と言っても、スタッフたちが「デイサービスで、身体機能の維持はできている」と判断すれば、自費対応になります。ただ、このあたりは明確に線引きできるものではないので、そのつどスタッフたちが丁寧に話し合うようにしています。

娘の心身気づかい母が飲み込んだ言葉とは

さて、話を戻しましょう。歩けるようになった安田さんですが、今年に入り、直腸がんが見つかり入院、その後大腿（だいたい）骨を骨折しました。ちょうどそのころ、お婿さんが病気になり、安田さんと同じ病院に入院しました。娘さんは、母と夫の2人を同時にお世話することになりました。

亡くなる前日、ケアマネジャーで看護師の石川和子（39）が、病院へお見舞いに行ったときのことです。安田さんはベッドの横にある杖を指さし、こう声を振り絞りました。「おうち、帰りましょ」。石川は、うなずきました。

その直後、石川は病室を出て娘さんに、「我々がサポートするから、お母さん、自宅に帰ってもらおう？」と聞いてみましたが、娘さんは、ずっと泣いていました。そして「明日、緩和ケア病棟に移るから、そこに泊まって面倒を見ます」と話しました。娘さんの心身は、限界を超えていたのです。それを知る安田さんは、娘さんには「自宅に帰りたい」とは、絶対に言いませんでした。

翌朝、安田さんは旅立ちました。8月初旬のことでした。娘さんによると、厳しくも優しいお母さんだったそうです。「家に帰りたい」という自分の気持ち以上に、「子どもを守りたい」という母としての覚悟と選択を見た気がしました。僕は、安田さんが最期まで自分の人生を選択し、生き切った、と信じています。

病院で「もう歩けない」と宣告された安田さん。テレビなどの取材にも積極的に協力してくれたので、「彼女みたいになりたい」と、「ぐるんとびー」に来る人たちも増えました。まさに、「希望の星」でした。いまも、その星は僕らを照らし続けてくれています。（構成・佐藤陽＝全6回）

（6）「なぜ？」を大切に、対話続ける

2019年10月26日

これまで、「ぐるんとびー」で看取（みと）った5人の方々を紹介してきました。ケースはそれぞれ違いますが、僕らは「その人らしい最期」を意識して関わらせていただいたつもりです。「その人らしさを認め、みんなの人生の豊かさを最大化する」ことがミッション（使命）の一つです。

もう一つのミッションに「Always Why（常に「なぜ？」と考える）」があります。「正しい」を固定化させず、常にスタッフ同士で対話をくり返し「最適解」を更新し続けるようにしています。2回目に取り上げた「わがままな」荻原一雄さんのケースも、そうでした。「介護でそこまでやる必要があるのか」「いや、本人らしく生きるためにはやるべきだ」……。僕らは何度話し合ったかわかりません。

正解は一つではありません。そのことは、中高時代を過ごしたデンマークで学びました。近代デンマークの礎をつくった偉人グルントビーが提唱したのは、生徒と教師が「生きた言葉」で対話を重ね、取り巻く世界を学ぶ、という教育法です。

時に煩わしく感じることもありますが、スタッフ同士、スタッフと利用者・家族で辛抱強く対話を続けています。さらにいえば、「ぐるんとびー」が入る団地約200世帯の方々とも対話を続ける必要があると思います。

あえて団地の一室に開設したのは、子どもを含めた住民に「介護」を身近に感じてほしかったからです。スタッフの多くは同じ団地に住んでいるので、住民とのコミュニケーションも取りやすくなっています。先日の台風19号のときも「福祉避難所」として開放しました。

*

現在「ぐるんとびー」の利用者は、小規模多機能型の事業所で26人、訪問看護ステーションが約80人。その方々を理学療法士や作業療法士、介護福祉士や看護師ら約50人で支えています。小さなお子さんがいるスタッフも多いです。

来年春には「訪問看護つき小規模多機能型の事業所」を団地の向かいにあるマンション1階に開く予定です。「医療依存度が高くてもやりたいことを応援する」ことが目的です。広さは約200平方メートルでコミュニティースペースやカフェ、子育ての相談窓口もつくります。今の「ぐるんとびー」のように、多世代のたまり場になってほしいと思います。

僕らに決まった方法論はありません。1回目と5回目に取り上げた、プールを使ったリハビリも、ほかの事業所ではあまり取り組まないように思います。僕たちは既存の枠組みで対応せず、「Always Why？」で変化し続けます。それが、利用者さんの「幸せな最期」につながると信じているからです。